

城陽市まちづくりフォーラム議事録

月日：平成18年9月23日（祝）

時間：午後1時30分～4時

場所：文化パーク城陽ふれあいホール

1. 開会、あいさつ 橋本昭名城陽市長

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました城陽市長の橋本でございます。

今日は、休日、土曜日というよりも秋分の日でございます。また、ほんとにさわやかな秋晴れになりました。皆様方、何かとご多用の中ではございますが、まちづくりフォーラムにご参加、ご出席をいただき誠にありがとうございます。

また、日頃は市政の推進にあたりまして、何かとご理解やご協力を頂いているところでございます。改めて、大変高い所からではございますが、厚くお礼を申し上げたいと思います。

さて、ご案内をさせていただきましたまちづくりフォーラムの開催にあたって、私の方からまず皆様方に一言ご挨拶をさせていただきたいと思います。

現在の城陽市の総合計画は第二次総合計画でございますが、平成6年に策定を致しました。「緑と太陽、やすらぎのまち・城陽」。この都市像を掲げて今日までまちづくりを進めてまいったわけでございます。しかしながら、この間大きく、私ども自治体を取りまく環境も変わりました。それから、日本の国の経済環境も大きく変わりました。そういう状況からして、これからのまちづくりを行う上で、改めて総合計画の見直し、改定が必要になったわけでございます。このたび、第3次総合計画を策定しようとして、今日まで、その意味等につきまして、順次進めてまいったものでございます。すごく環境が変化したことの一つが、やはり少子高齢化の進展で、それから情報化社会の到来でございます。さらには地方分権の進展です。これらはこれからのまちづくりに大きく影響をし、そういったことを視野に入れたまちづくりを行わなければならないといった時代にあるわけでございます。こういったことから、総合計画の策定、これの手順というのは、いろんなやり方がそれぞれの自治体にあるというふうに思うわけでございますが、今大変厳しい財政状況のもとの中では、市民の皆さん方にまちづくりそのものにもご参画いただき、それからご意見を頂く、こういった中で、これからのまちづくりについて、皆様方とともに語り合っていく、その意見を反映させていく、このことがまちづくりには欠かせないところであるわけでございます。そういった関係から、私は絶えず市政を進める上で、市民参加のまちづくりを一つの施策として、今日までその取組みを進めてまいったわけでございます。

今日は、パネラーにご参画をいただいております、ワークショップにご参画いただいた方々をパネラーとして登壇いただくわけでございますし、本日この会場にも大変お世話いただきましたワークショップメンバー皆様方もご参加いただいているようでございます。改めて、今日まで、大変お忙しい中で、市民まちづくりワークショップにご参加いただいて、種々のご意見を賜りお礼を申し上げます。

今日は、ご案内の通り、今里先生にコーディネーターをお願いするとともに、広くパネラーの方にご参画いただいて、今日ご参会の皆様方とともに、このフォーラムを進めていただくことに

なっているわけでございます。後ほど、会場においていただいている皆様方からもご意見を頂戴するような局面があるように聞いております。限られた時間になるかと思うわけでございますが、どうぞよろしくお願い致しまして、私からの開催にあたりましての御礼のご挨拶とさせていただきます。今日は本当にありがとうございました。

2. 基調講演「協働のまちづくり」 今里 滋氏

皆さん、こんにちは。あいにくといい天気になりまして、動員が心配されましたが、溢れんばかりの聴衆の方に聞いていただけることは大変幸せでございます。30分間お時間をいただいておりますが、用意したパワーポイントの枚数が多いので少し早口になるかもしれませんがご容赦いただきたいと思っております。

まず、私自身のまちづくり体験から話をさせていただきたいと思っております。

まちづくりに手を染めてかれこれ十五、六年がたつわけでございますが、そのきっかけというのは、ここに出てきますけれども、私の娘、結婚して10年間、子宝に恵まれなかったんですが、10年目にして子どもが生まれて、一人娘になるわけですがけれども、それがきっかけだったなというふうに思っております。

今、21歳になりまして、関西学院大学に進学して、国際ボランティアに熱を入れているわけですが、しかし、ちょうど娘が生まれたときは、私の黒々とした髪の毛のまだ残っているときでございます。ちょうど家族に、赤ちゃん、それから家内のお母さん、大正生まれのおばあさんがいた。ちょうど古希70歳に達するぐらいで、社会的弱者の代表のような2人が家族にいと、こういう状況だったんですね。

子どもが成長してきますと、赤ちゃんは普通2歳を頂点にしてかわいくなるわけですね。女の子は3歳ぐらいまでかわいい。その後、憎たらしくなっていくわけですが、子どもが生まれますと、お母さんたちの母性愛にはかなわないんですが、おやじはおやじなりに父性愛みたいなものが生まれてまいります。これは台湾の故宮博物院で見かけた父という言葉の字源なんですけれども、男が盾を持って家族を守っている姿が父だと、こういうふうに書いてございました。やっぱり私自身も全力で家族を守らないかなと、そういう気持ちになってきていました。

私は、ずっと九州で生まれ育ち、仕事をしてきたわけですが、それは福岡市の箱崎というところ、京都で言えば京大のある百万遍みたいな学生街なんですけれども、この町というのは国道3号線というのが西側、それから鹿児島本線、基幹鉄道ですが、東側に通っていて、九州大学があって、南のほうに箱崎八幡宮という日本三大八幡宮の1つの940年に創建された古いお宮でございます。

福岡市というのは、昭和20年6月19日に大空襲を受けて焼け野原になるんですが、箱崎という町には米軍は爆弾を落とさなかったんですね。理由は、九大農学部の上に米軍の捕虜を収容する捕虜収容所があって、友軍を殺さないためにあえて爆弾を落とさなかった。そのために箱崎というか、福岡市の東部は昔のままの姿が残ったわけですね。

昔のまちというのは、京都もそうですけれども、非常に道が狭い。路地がたくさんあります。箱崎というまちもそうございまして、大学通りというメインストリートなんですけれども、幅員6mしかない通りに日に多いと5000台ぐらい車が通る。なぜそんなに多いかというと、国道3

号線の混雑を避けて博多駅方面に行くにはこの道を通るのがいいからということなんですが、狭い道に 5000 台の車が通るとどうということになるかということ、非常に危険で歩きにくい道になるわけですね。特に社会的弱者という方々にとっては危険この上ないということで、うちのおばあちゃん、それから子どもを連れた家内も大変危険な目にしばしば遭ったんですね。それで非常に腹が立ちまして、このまちは一体どうなるんだということで、東区役所というところに電話をかけましたら、区役所に言われても困りますと。これは交通規制の問題ですから警察に言ってください。警察に言いますと、あなた、モータリゼーションの時代だから、車の規制を何とかといっでもしょうがなかですたい。道ば広ろうせないかん問題ですから、都市計画課に言わんですかと。福岡の都市計画課に言ったら、何と昭和 22 年に幅員 22m の大きな道路になると都市計画決定されています。安心せんですかと。安心せんですかと言われて、いつ広うなるとですか。まあ、都市計画というのは時間とお金がかかりますけん、もうちょっと待たんですか。どのぐらい待ちやよかですか。40 年ぐらい待ってくれば何とかなりますと。これで私は切れまして、自分たちのまちづくりをやらないかんと思いだめたところに、まちに大きな変化が起ころうとしていた。

その変化とは、九州大学の箱崎キャンパスが移転をする、JR 鹿児島本線が立体交差化することですね。九州大学、箱崎には約 8000 人も学生、教職員が暮らしています。この人たちがいなくなるわけですから、地域経済に大変な打撃が起こるわけです。今は九大が移り始めて、すごい影響が出ていますね。

それから、JR 鹿児島本線が高架になるきっかけは、1980 年に隣の小学校の子どもが 3 人、一度に跳ねられて亡くなった。それで地域の人たちは何とか踏み切りをなくそうということで、毎月 10 円、町内会費にプラスをして、それで運動をやって、高架事業が決定した。大体こういう高架事業とか区画整理事業というのは反対が多くて進まないんですけど、事情が事情ですから、やっぱり亡くなった 3 人の子どもたちが後押ししてくれたというふうに思うんですけども、どんどん進みまして、順調に、現在、高架線になって、それから区画整理も行われまして、道路体系も変化しています。

日本のまちというのは、道路が 1 本できるだけでもものすごく変わります。ところが、このまちには、4 本の 22m の道路ができるということですけども、できてしまっているんですけども、町が全然違うまちになりました。

こういうことをきっかけに、私もまちづくりに頑張らねばいかんということで、地域社会の諸活動、諸団体に参加を始めまして、古い町ですので、まずはお祭りに参加をしなければいけない。10 年間、消防団にも入りました。これは訓練のときの写真でございます。

それから、お宮の雅楽のボランティアグループ、800 年続いているんですけども、これにも入りまして、竜笛を吹きました。

それから、辛かったのが校区運動会ですね。仮装行列が必ず昼ごはんを食べた直後にやるんですが、うちの町内というのは女装が好きなんです。あんたも地域に入りたかったら女装しなさいと。私は九州大学法学部教授ですから。そんなの関係ないですと言われて、泣く泣くこういう格好をしまして……。一度やってしましますと慣れてしましまして、こんな格好も平気で。

しかしながら、やっていると、だんだんと伝統的な地域組織の限界を感じるんですね。PTAとか地域のいろんな役員をやってきましたけれども、どこか足りないなと。1 つは行政に直結

しているところがあるし、縦割りだし、それからどうも行政に言われて動いているような他律性というところがぬぐい切れないと。一体理由は何なのかということで、ここに映像を入れているんですが、町内会というのが何でできてきたのかというところをちょっとごらんいただきましょう。

(ビデオ上映)

簡単に見ていただきました。こういう町内会なんですけれども、今ありましたように、復活をしていきます。当時の自治省、現在の総務省は、1954年に広域開発行政の補完として町内会等の長を行政末端の特別職公務員として委嘱する。いろんな名前がついていますね。行政連絡員とか、地方世話人とか、そういう形で町内会が行政の目的に利用されるということが全国的に行われていったわけです。

この伝統というのは、現在も健在じゃないかと思うんです。国、県、市町村の主管が教育委員会の下に体振があると、リサイクル推進協議会が衛生局のもとに作られていくとか、そういう画一的、一律的な事業が町内会に丸投げされていくという現象があちこちで見られます。ということは、各種団体の行政下請け機関化、パートナーシップではなくて、パートナミシップというふうに言う人もいるわけですが、時には地元選出議員、市会議員、国会議員、県会議員等の集票マシンになっていく。定例的な年中行事の消化、毎年毎年同じことを繰り返していく。慢性化、惰性化していく。それから、メンバーは固定化して、年功序列化していく。結局地域のほんとうの公共問題に対して無関心、無力化、そういう限界を私は感じたんですね。

それで、新しい住民自治が何か必要だということで、地域の自治連合会という地域の有力者の方々、長老の方々に、このままではだめですばいと。これだけ大きな変化がこのまちに起こりよるのに、今までの自治会とか、今までの各種団体の仕組みだったら太刀打ちできません。新しいまちづくり協議会を作りましょうということで4年間説得して、それなら作りましょうということで納得していただいたんですね。これはそのときの町内会長です。まちづくり協議会ができました。

しかし、まちづくり協議会ができると、住民の皆さんは、この協議会を中心にして動き始めたんですね。これは先進地視察に行っているところです。それから、地域未来トークというシンポジウムを何回もやりました。分科会を作ってワークショップをやる、伝統芸能保存会をやる。夏祭りも協議会でやっていく。シンボルカラーを作り、町の歌を作ってやっていくというふうになってきたわけです。

それには理由というのは、日本人にはもともと、特に300年、徳川時代の300年間で培われた自治の伝統というのがあって、自分たちのことは、自分たちの地域のことは自分たちでやるという自治の伝統が多分DNAの中にあつたから、いや、今でもあるから、住民自治というのをやり始めると、ほんとうにすばらしい力を発揮するわけですね。

そういうすばらしい力を発揮する、今ちょうどそういう時期になってきていると思います。よく言われていますように、分権分節型。分節というのは国が何でも言ったとおりにするのではなくて、国があつて、都道府県があつて、市町村もあつて、市町村の中にも各学区、校区があつて、そういう校区単位で活動していくという、一枚岩ではない、いろんな自治の単位、統治の単位があるというのが分節型。そういう市民社会に移る時期に来たと思います。そのきっかけになった

のが地方分権一括法です。

これは国と地方自治体の役割分担が変わったというふうに言われるんですけども、特に黄色のところですね。住民に身近な行政はできる限り地方公共団体に委ねなさいと、こういうふうになってきたわけです。ということは、住民の生活、安全、健康を守っていく最初の責任は、一番基本的な責任は地方公共団体、つまり城陽市なら城陽市にあるんですよということが大前提になってきた。

この背後にある関係というのは、いわゆる補完性の原理、難しい言葉ですが、意味は簡単で、個人でやれることは個人が頑張りましょう。近隣社会でやれることは隣近所で頑張りましょう。自治体でやれることは自治体がやりましょう。足りない分を国が補完しましょうという考え方がこの地方分権の背景にあるわけでございます。

さらに、公と民の関係というのが変わってきたように思います。これまでは公のことは官がやるよ、プライベートなことは民がやりなさい、こういうのが当たり前だったんですが、だんだんと官と公と分かれてきまして、民が公のこと、例えば公共サービスの提供なんかも民がやって全然構わないじゃないかと。こういう考え方が世界的に広がってきております。

そういう考え方を先取りした例として、よく引き合いに出されるのがイギリスです。イギリスのブレア首相が誕生いたしまして、彼はコンパクトという新しい仕組みを持ち込みました。地方公共団体の場合はローカルコンパクトといわれますが、コンパクトというのは契約です。しかも、約束を破ったら針千本飲ますというぐらいの拘束性の強い制約がコンパクトです。コンパクトというのは、国と民間、特に向こうはボランティアセクターと言いますが、市民とかボランティア団体、NPOが契約を結んで、国だけがやるのではなくて、そういうボランティアの方、市民社会、地域の方々、あるいはNPOの方々も公共サービスを担ってください。それに必要なお金とか、それに必要な支援措置とか、それは一生懸命国がやります。市民の方々もきちんとお金は透明に公正に使ってくださいねというのがコンパクトです。それを国レベルのナショナルコンパクトと、地域レベルのローカルコンパクトというのを作って、そして地域社会と、それから地域の政府と一緒にやれる、お互いにやれることを分け合って、そして協調しながら公共サービスを行っていく、地域を経営していく、こういう考え方を取り入れたわけです。この考え方をパートナーシップというふうに言います。

そういうパートナーシップを適用したまちづくりのやり方が、英語ではエリア・ベースド・イニシアチブという、地域に基礎を置いたまちづくり、地域づくり、地域主導のまちづくりと呼ばれるものでございます。それはどういうものかということ、これまでイギリスも、行政の各種縦割りの中で地域も動いていたんですね。住宅・環境については、住宅協会、環境団体とか、生活・安全は警察とか、産業・雇用は商工団体とか、文化とかレクリエーションは文化協会というふうに縦割りでやっていた。これを改めて、そういう縦割りで出していた補助金とかを1つにまとめてしまいましょう。まとめてしまって、地域の中に中間的な組織を作って、まちづくり協議会のようなものを作って、そこに各種団体が集まるような形にしましょうという仕組みをイギリスは作って、これで各地域のまちづくりを今進めているわけです。これは非常にうまくいっているということで、日本からもたくさん行政関係の方、あるいはまちづくり関係の方が視察に見えております。

時間があつたらイタリアの話をしようと思ったんですが、簡単に言っておきますと、ロバート・パットナムというアメリカのハーバード大学の学者がイタリアに注目しまして、イタリアでも州によってまちづくりがうまくいっているところ、経済がうまくいっているところは違うな。何でそんなに差があるんだらうということを研究した結果、非常に民主的なつながりを持った、市民間に相互信頼のネットワークがある、そういう地域ではまちづくりも経済もうまくいっていると。特に人々の間に信頼というのか、お互いさま、まちづくりに参加することでお互いの利益になるなというお互いさまの考え方、これを互酬というふうに難しくは言うんですが、実はそういう考え方の原点は日本にあるよということをパットナムは言うんですね。日本にもお互いの助け合いの組織というのがあった。それがたまたまイタリアにも市民間の信頼のネットワークとしてあって、それがしっかりあるところはまちづくりも地域経済もうまくいっていますよ。そういう信頼のネットワークのことをソーシャルキャピタル、社会的共通資本というふうに言ひまして、今非常に注目を浴びているわけです。

こういうことを考えますと、これからの地域社会というのは、私たち、行政学とか政治学で使っている用語でいきますと、よくガバメントからガバナンスへ変わりますということを言ひます。何ですか、そのガバメントとは。ガバメントというのは、要するに統治というふうに訳されますが、お役所が住民に対して一方的に公共サービスを提供して、はい、これは福祉でございます、これは教育でございますというものです。住民も、ああ、そうですかというふうに一方的に受けていく。しかし、ガバナンスは、そういう一方的な公共サービスの提供を役所から受けるということではなくて、共治、共に治めていくというふうに訳されます。それは政府と住民とが対等の関係に立っていて、そして住民自身が公益、公共サービスを担う権利もあるし、義務や責任もあると、こういう考え方なんですね。そういう住民のことを、つまり自分たちも公益をやっていくんだという自覚を持った住民のことを市民と言ひましょう。そういう市民がたくさんいて、頑張っている社会を目指している、そういう社会を市民社会、シビルソサエティと言ひましょうということで、シビルソサエティをいかに築くかということが世界的に大きな課題になってきています。

私はこういうことを考えますと、コミュニティ、城陽なら城陽という地域社会を自立的に経営していく。お役所に任せるのではなくて、市役所に任せるのではなくて、それぞれの校区、学区に住んで暮らしている住民自身が主体になって地域を経営していく、動かしていくということがこれから必要になってくるだらうと思うんです。

そのときに2つの軸があると思います。1つは、住民自治の軸です。もう1つは市民公益事業と呼ばれるものの軸です。

住民自治というのは、さっき言ひましたように戦中に作られた官製型の自治のシステムから、まちづくり協議会や自治協議会といった自主的な組織、地域の問題を総合的に協議、解決して、地域経営の主体となるような自発的な住民自治組織を作っていかなければいけないというふうに思ひます。

福岡市の私たちのほうで作ったまちづくり協議会の特徴は、まず自発的で民主的な住民組織であるということ。特定の有力者が支配しないということですね。それから、地域の問題を総合的に考えていく。行政主導型でもなくて、縦割り行政に拘束されずに、かつ、年をとっているから、

次、あなたの番ですよというような年功序列型ではなくて、やり気のある人が、年齢に関係なく、性別に関係なく、やればいい。しかもシンクタンクとしても機能して、地域の経営を目指しましょう。さらに地域には、人材、宝のような専門家がたくさんいらっしゃるから、そういう人たちを活用しましょう。やがては地域の政府を目指しましょう、こういうものではなかるうかと思うんですね。

しかし、それだけでは足りないと思います。もう1つ、市民公益事業というのが必要です。これは行政に依存しないで、市民自身が公共サービスの供給を行うということですね。例えばNPOであるとかコミュニティビジネスとかあります。あるいはまちづくり株式会社を作って市民が公共事業を取り込むというケースがあちこちに出ています。例えば京都の醍醐地区では市民自身がコミュニティバスを運行しています。城陽でもバスが走っていますが、あのバスを市民自身がお金を出し合って運行するというふうに考えてください。そういう市民自身による公共事業、公共サービスの提供ということが必要になってまいります。

これは私のNPOでやっているコミュニティレストラン及び劇場です。この劇場は1株5万円の株を200株発行して1000万円作って、それで劇場を作りました。表現によるまちづくりというのをやっています。今現在、常設小屋として利用している若い劇団が非常に成長しまして、この前の台風13号の日、それにもかかわらず満席になるくらいお客さんが来てくれました。それくらい表現というのはまちを変えてくれます。アートはまちを変えてくれます。

そういうことで、これから協働のまちづくりをやっていくときに、それはわかるけれども、じゃあどうしたらいいんだというふうによく言われるんですが、これはやっぱり問題は人なんです。人が大切です。社会企業家と呼ばれる、英語で言えばソーシャルアントロプロナーといいますが、単にお金を儲けるのではなくて、世の中の社会をよくするために人助けになるためのサービスを提供する、あるいは物を作りましょうというような、そこに自分たちでお金を回しながら事業をやっていくような人たちが社会企業家です。

例えば、この下の1階に障害者のための共同作業所のバザーがありますが、障害を持った方々が作る陶器がある。その陶器を売るショップ、そういうのが社会企業です。そして、それを支える市民社会というのは、こちら側で非常におしゃれな清水焼があるけれども、一方では障害者の方が作ったちょっとごつごつしたお茶碗がある。どちらを買いますか。障害者の作られたお茶碗とかお皿を使いましょう。それはなぜかということ、障害を持った方が自立して自分たちで生活をしていける、そのためには自分たちが、お皿とか茶碗とか、彼らが作った品物を買ってあげる。そういうことによって障害のある方が自立していける社会が築けるわけですね。そういうことを意図的に選別する、選択する市民が多い社会が市民社会です。だから、この社会企業家と、それを支えるコンシューマー、消費者、市民の方がいて、人にやさしい、お互いさま、お互いに助け合いが広がっていく、お互いに支え合う社会というのができると思います。それを、事業を興していける方々が社会企業家と呼ばれる方々です。

もう時間がなくなりましたので今日は紹介できませんでしたが、例えば京都市の春日学区というところでは、町内会が中心になってお年寄りを助けていく事業をやっております。町内会が変身すれば、社会企業ができるということの例でございます。

ということで、私は、これから協働のまちづくりをやっていく上では、社会起業家というもの

が社会を変えていく、いい方向に持っていく原動力になるだろうと。そのときに、これから大量に退職して地域に戻る団塊の世代の皆さんに特に期待をしたいなというふうに思っております。

城陽市におかれまして、そういう社会起業家がたくさん輩出をする、そういうまちづくりをぜひ築いていただきたいと。私も及ばずながらお手伝いできればと思っております。ご清聴どうもありがとうございました。

3．第3次城陽市総合計画策定の取り組み状況について説明 省略
有川利彦城陽市行財政改革推進部次長

4．市民まちづくりワークショップの活動紹介 省略
澤田 哲氏（市民まちづくりワークショップメンバー、城陽環境パートナーシップ会議会長）

5．パネルディスカッション

コーディネーター

- ・ 今里 滋氏

パネリスト

- ・ 大本 久美子氏（市民まちづくりワークショップメンバー）
- ・ 久保 房郎氏（元 KBS 京都アナウンサー）
- ・ 鈴鹿 義弘氏（市民まちづくりワークショップメンバー、城陽市民生児童委員協議会会長）
- ・ 堀井 美郎氏（城陽商工会議所総務委員会委員長・常議員）
- ・ 栗栖 俊次（城陽市助役）

司会： 皆様、お待たせいたしました。パネルディスカッションに移らせていただきます。舞台のほうに座っていただいておりますので、私からご紹介させていただきます。

本日のパネルディスカッションのコーディネーターを務めていただきますのは、先ほど基調講演をしていただきました同志社大学大学院総合政策科学研究科教授で九州大学名誉教授の今里滋様でございます。先生、よろしくお願いたします。

続きまして、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。会場の皆様から向かって左側から、市民まちづくりワークショップのメンバー、大本久美子様です。皆様よくご存知の元 K B S 京都アナウンサー、久保房郎様です。続きまして、市民まちづくりワークショップのメンバーで城陽市民生児童委員協議会会長としてもご活躍されていらっしゃいます鈴鹿義弘様です。続きまして、城陽商工会議所総務委員会委員長で常議員の堀井美郎様でございます。そして最後になりました、城陽市助役、栗栖俊次でございます。よろしくお願いたします。

それでは、ほんとうに活発なご意見を期待しております。コーディネーターの今里先生、よろしくお願いたします。

今里： 承知いたしました。では、ただいまよりパネルディスカッションを始めていきたいと思

います。

全国各地でこういうパネルディスカッション、まちづくり、地域づくりをテーマとしたイベントが開かれているんですけども、助走段階を乗り越えて、理屈を言い合う段階から、実際何をやるんだという、ハウツーですね。具体的に何をどう実行するのか、そういう段階に来ております。それぐらい全国でいわばまちづくりの競争が始まっているということが言えると思います。現に、住みやすい温かいまちと、住みにくい冷たい町というのが分かれてきているような気がいたします。

これから、さっき有川次長からありましたように、少子、高齢、かつ財政危機の時代を迎えていくわけですが、そういうマイナスをいかにプラスに転化して、いい地域社会、住みやすい地域社会を作っていくのか、そういう時代を迎えています。ぜひ城陽においてまちづくりの最先端で活躍しておられる皆様の熱いご議論を期待したいと思います。

それでは、最初に、3分間ずつ自己紹介ということで、自分がこれまでどういう形でまちづくりにかかわってきたのかということを中心に、大本さんのほうからお話をいただきたいと思います。時間は3分でございますので、3分を過ぎたところで、私、すみませんと一言小声で言わせていただきますので、よろしく願いいたします。

大本： 皆様、初めまして。大本と申します。どうぞよろしく願いいたします。

自己紹介も含めまして、このワークショップに参加させていただきました経緯と、ワークショップで今回どのような活動をさせていただいたのかを簡単にご説明させていただきます。

まず、昨年10月の広報で、たまたま市民まちづくり会議の委員募集という文字が目にとまりまして、一市民の声がどのように行政のまちづくり計画に生かされるのだろうかという関心を持ちまして応募させていただきました。公募市民という立場で今回ワークショップに参加させていただいております。

私、個人的なことなんですが、中学1年生のときにお隣の宇治市から城陽市に転入してまいりまして、途中10年ほど少し城陽市を離れましたが、実家がありますものですから、たびたびこちらに戻ってきて、そして今こちらに住まわせていただいているので、城陽市民歴というのは比較的長く、城陽市に大変愛着を持っております。親の介護ですとか、これから自分自身がおそらく老後生活もこのまちでという思いが強いので、決して他人事ではなく、城陽がより住みやすいまちに、高齢者にも、そしてすべての世代の人たちにも住みやすいまちになってほしいという、願わくばほかの地域からうらやましがられるような、福祉の充実したモデル的なまちになってほしいという強い願いを持って参加させていただきました。

また、現在、高校3年生の人間福祉という選択授業ですとか、介護福祉士を養成する専門学校等で講義をさせていただいていることなどから、個人的にもこの数年、福祉というものに、特に地域福祉に関心を持っておりまして、共生、連帯感のある生活者、あるいは地域社会に参画できる市民を育成するという教育に携わっている者の1人として、自らが地域社会の活動に参加したり、さまざまな世代の人たちとの交流の中から教育資源を掘り起こして教育活動に結び付けていきたいという思いも常々持っておりましたので、非常勤

講師という時間的な融通がつきやすいという立場をうまく利用しまして、さまざまところで勉強をさせていただく機会を得ております。

今回も、城陽市の行政の重要なポストにおられる方々からさまざまなお話を聞かせていただき、意見交換等をさせていただいたことはほんとうにいい勉強になりました。

このワークショップに参加させていただいた具体的なテーマを申し上げますと、例えば、すべてに参加できたわけではないのですが、私が参加した具体的なテーマを申し上げますと、「コミュニティ活動の活性化や安心して暮らせるまちづくりについて」、あるいは「健全な都市経営、行政経営について」というような内容の話し合いに参加させていただきました。そこで述べさせていただいた意見ですとか感想等については次の発表の機会に詳しく述べさせていただきたいと思います。以上です。

今里： ありがとうございます。それでは、久保さん、お願いいたします。

久保： 昨年までKBS京都におりました久保です。もう定年になりまして、自分の事務所を構えまして仕事をやっておりますが、また司会の仕事なんかありましたらぜひよろしく願いしたいと思います。

ディープインパクトが10月1日、凱旋門で走りますけれども、何とかしてくれると思いますが、日本の競馬は東と西に分かれていますけれども、美浦と栗東なんです。20年ほど前は美浦の馬ばかりが勝っていました。賞金の7割は美浦の馬が勝っていました。栗東は3分の1ぐらいしか勝てなかったんですが、それが今は完全に逆転しています。当時、非常にピンチだった栗東が自分たちで自分たちの生きる道を探りました。それが小泉さんが言われる規制緩和だったんです。調教師は調教師の仕事、騎手は騎手、調教助手は調教助手、厩務員は厩務員の仕事というのが今までであったんですが、その枠を取っ払って、厩務員さんが調教にも乗る、調教助手の人は馬を持つ、そういうほんとうにフレキシブルな組織を見事に作り上げまして、今こういう隆盛を迎えていると。ピンチをチャンスに変えました。

城陽も、僕も京都府南部の住民になって30年なんです。団塊の世代よりもちょっと前になるんですが、比較的土地が安い、家も安いというので、京都市内には住めないけれども、南部だったら家が買える。そのうちにバブルがどんどん進んでいきますから、2000万円買った家が3000万円になって売り抜けて、きっと京都市内に家が買える。そんなふうな気持ちの人たちが私どもの世代ではないかなという気がするんです。ただ、やっぱり住みやすいからずっと住んできた。でも、ほんとうに心の底からそこに生まれ育ったわけではないですから、地域に愛着があるかという、そうでもないという、非常に中途半端な世代です。

これから団塊の世代の方々に期待したいという話もさきありましたけれども、そういうおっさん、おばさんにはちょっと期待するのは無理なので、その条件整備をこれからどうやっていくかということは、後ほどまた、少子、高齢、そういったピンチをどうチャンスに変えていくか、具体的な話をしてみたいと思います。以上です。

今里： ありがとうございます。鈴鹿さん、お願いいたします。

鈴鹿： 市民まちづくりワークショップの一員で城陽市民児協の鈴鹿でございます。

このようなところで話をするというのは生業ではございませんので、いろいろ発言にも問題があるかと思えますけれども、このパネルディスカッションに参加させていただきましたので、よろしくお願いいたします。

先ほどワークショップの活動については、澤田さんから概要が報告されましたが、1回目から3回目まではKJ法による「発想」と「問題解決」を行い、毎回グループごとに意見を集約するというような方式で進められました。ちなみに、当初このワークショップには3つのグループ分けがあり、Aグループは、「豊かな自然環境や多彩な地域資源の保全・活用」というテーマで、私は最初このグループに所属してワークショップに参加してきました。Bグループは「コミュニティ活動の活性化や安心して暮らせるまちの顔づくり」、Cグループは「だれもが移動しやすい交通環境とまちの顔づくり」等々でした。

1回目は、先ほどもちょっと話がございましたが、現在の城陽市が住みやすいかというような問いかけがあり、第2回目は城陽市の将来像という問題提起がありました。

第3回目は、市民、事業者と行政の役割分担について討議をいたしまして、第4回目につきましては、目指す姿とか、あるいは分野別の展望と施策とか、役割分担等について意見交換をしまして、行政サイドから城陽市を取り巻く環境について講義を受けました。先ほど有川次長から話がございましたが、講義の内容を大綱的に集約いたしますと、自助、共助、公助の相互関係を市民と行政が正しく理解し合うことが肝要ということであったというように私は理解しております。

5回目と6回目はメンバーチェンジが行われまして、私は第5回目には「健康で幸せなまちづくり」というのに参画をし、第6回目は「健全な都市経営」、先ほど大本さんからもちょっと話がございましたが、このグループのテーマに参加いたしました。自分の担当テーマについて、行政の代表者といろいろ意見交換をいたしました。

なお、第5回終了時には、総合計画に対して各自が個々に意見を提出することがございましたので、私なりに意見を提出させていただきました。

第7回目は総合計画のたたき台について、メンバーの意見集約の結果と確認が実施されております。ちなみに、先ほどお話がございましたように、7回ほど実施されたわけでございますけれども、私も他の行事とのバッティングがございまして、2回欠席をいたしましたので、出席率は70%ということを申し添えておきたいと思っております。

今里： ありがとうございます。それでは、堀井様、よろしくお願いいたします。

堀井： 堀井と申します。よろしくお願いいたします。職業は製造業で、産業機械の大型の部品の加工をしております。液晶とか半導体を作る機械の大型部品の機械加工です。

まちづくりとの関わりで申しますと、30歳から40歳までの10年間は城陽青年会議所に所属をいたしまして、マラソン大会に代表される社会開発運動や青少年の健全育成事業の勉強をしております。

商工会議所に入りましてからは、商業関係で言いますと、商業まちづくり協議会で大型店が出店をするときの店舗面積、営業時間、休日等について、中立的な立場からの意見集約委員をさせていただきました。

また、行政の商工業活性化推進審議会にも出させていただきました。現在は、会議所の

中で総務委員会に所属し去年から今年にかけまして、去年は市町村合併の勉強、今年は市が計画をされております新市街地計画、大久保バイパス、今の24号線の東側と西側に市街化をしようという市の計画がございます。その具体的な内容についての勉強会を開催いたしました。

地域では、南部コミセン、今池コミセンで長い間、活動をしてまいりました。

今日は、商工業の立場からのまちづくりについての意見を述べさせてもらいたいと思いますので、よろしくお願いいいたします。

今里： ありがとうございます。それでは、栗栖助役、お願いいいたします。

栗栖： こんにちは。助役の栗栖でございます。今日はたくさんこのようにお越しいただきましてまことにありがとうございます。

私の場合は、城陽市の市役所でどういう仕事をしてきたかという点で紹介をさせていただきたいと思います。

昭和47年に城陽町から城陽市になりました。その年に城陽市役所に採用されまして、今で34年になります。私の市役所歴が、市政施行に重なっていますので非常に数えやすいんですが、来年の35周年のときに勤続35年というふうな経歴になっております。

もともと市役所に入りましたときに、税務課に配属されました。その後、企画を経まして、財政課に配属されまして、それからしばらく財政で10年ほどやっております、その後管理職になりましてからは総務課とか市民課長とかいろいろ経験しております。平成7年に福祉保健部長を拝命いたしまして、3年間福祉に携わっております。そのときに鈴鹿さんなんかにも非常にお世話になったんですが、その後に総務経済部というのがありまして、そこから総務部長ということで4年ほど務めました。橋本市長が平成13年9月に市長になられて、その後、平成13年12月に助役に選任していただきまして、今で5年目になっております。

今言いましたように、いわゆる事務畑ですので、特別な資格、技能というのはありませんけれども、そういう経歴の人間でございます。どうぞよろしくお願いいいたします。

今里： ありがとうございます。まちづくりとのかかわりで自己紹介をしていただきましたけれども、次の発言は5分間ずつということになるわけですが、これからの城陽市はどうあるべきか、城陽市の課題、そしてご自分の目的も含めて、こういうことをやりたいんだという、城陽市の課題とご自分のまちづくりの目的というところをお話しさせていただきたいと思っております。

順番が1つずつずれていきまして、今度は久保さんからお願いしたいと思っております。

久保： さっきもちょっと話したんですけども、KBS京都に入って20年ばかり京都市の広報番組を担当して、テレビをやってきました。僕は大阪に育って、大学だけが京都だったという大阪の人間なんです。京都に来て、いろいろ取材をすることによって教えてもらったのが、学区制と体振、これが見事にまちを動かしています。それから、地域の子どもたちを中心に何世代も、業種も全く関係なく、そういう地元の行事を運営して成果を出している。これは大阪ではありませんでした。この辺が京都のよさ、それをこれから城陽がどう自分たちで育てていくかということになるのではないかと思います。

京都府の南部というのは、宇治、城陽、京田辺、久御山もありますけれども、それぞれ特徴があります。マスコミの人間として外から見ていて、宇治は観光資源、宇治茶、京滋バイパス、さまざまな整備、伝統、歴史があって、それを中心にしてきつとこれからも動いていくだろうなと、はっきり見えます。

久御山、ここは非常に特殊なところで、あまり新興住宅街というのがない。地元の農家の方々とか、小さな工場だとか、インフラの面で、そっち側に金を使うよりもということだったんだろうと思うんですけども。ですから、今でも地元の方々、長年住んでいる方々が商工会であったり、JA山城久御山町であったり、そういう人たちが中心になって町を動かしています。ゴルフ大会をやったり、こういうイベントをやったり、そこには必ず商工会、それからJA山城の人が中心になっている。地元に住んでいる、後から来た、ミニ開発はありますから、住んでいる方が小さくなっているという絵があって、それはそれで方向性ははっきりと見えていくんじゃないかなと。

京田辺は完全に大阪を向いています。地域の発展ということを考えると、1歩も2歩も京田辺のほうが先に行ってしまうのではないかと。西のほうへどんどん広がって行って、松井山手ですか、学研都市線、それでもって全然京都へ向かない、京都新聞が売れない、朝毎読が中心になっているという八幡的なまちになっていくんじゃないかなという気がしました。それぞれいいと思います。まあでも、これからのまちづくりという点では、住んでいる方々がばらばらの方向を向いていくわけですから、なかなか自治ということに関して言うと難しい面は出てくるかなと思います。

城陽は、中途半端。何もかも。ごめんなさいね、住んでいる人。特徴が、確かに住みやすいんですよ。温暖です。それから物も安いです。住みやすい。ただ、これからどちらを向いていったらいいのかというのが周りから見ていて見えないし、住んでいる人も見えない。やっぱりこれから、太陽と緑、あったかい地域をどう作っていくかということが、全国的に見ても非常にピンチなまちだけに、チャンスです。あったかい地域コミュニティをどう形成していくかということをみんなで考えたら、みんな同じ方向を比較的向いているだけに、大阪に向いていない。比較的京都ですよ。奈良線と近鉄、それから同世代の人も多い。ここへ住むようになって、新興住宅街の人も同じような悩みを抱えている。少子高齢化、ほんとうに団塊の世代の人たちは子どもさんがいるんですけども、どこかへ行ってしまっている。お父さんとお母さんだけになってしまうということになって、まち自身が死にかけてしまう。新興住宅街なんか、今そういう匂いがちょろちょろしています。それをどう克服していくかということがこれからの課題だし、挑戦のしがいもあるものだと思う。

そこで、最初に戻りますけれども、体振、そういったものを新興住宅街だったエリアにどう根づかせていくかということが楽しみですね、逆に。ですから、ここがほんとうに住んでいてよかったということを全国にアピールできるようなまちづくりをするチャンスだなというふうに思います。商業とか工業のことはよくわかりませんが、でも、そういう地域コミュニティがきちんとしていけば、地域の商いなんか当然振興していきだろうし、地域を愛するということがほんとうに心の底から芽生えていけば、どこで物を買うかとい

うのは当然変わってくるし、商売をしていらっしゃる方も、その地に住んでいらっしゃる方とのコミュニケーションをどうとっていくかというのは、自ずから道が見えてくると思うので、全体的に底上げできるのではないかと思います。

キーワードは、後からまた話しますけれども、新興住宅地等の改良というか、規制緩和というか、50坪の土地を20坪、20坪に分割して売ったっていいじゃないの。3階建てを建ててもいい。これ、規制緩和。昔は、環境をきちんと守るために、50坪なら50坪の区画があって、小さな家がミニ開発されたら嫌やから、それで土地の値段が安くなったら嫌やから、そんな売ったらあかんでというような取り決めもあるみたいですけども、そんなものはとっぱらわらなあかん。

それから、魅力ある高校、中学をどう作っていくか。ここが2つポイントだと思います。また後から続く、でございます。

今里： ありがとうございます。それでは、鈴鹿さん、お願いいたします。

鈴鹿： これからの城陽市はどうあるべきかということで大きな課題をいただいているわけでございますけれども、私が民生児童委員ということで配慮願ったのか、行政サイドから指定されたテーマは、「福祉と環境」及び「行政経営」であり、私はこのテーマにかかわるワークショップに参加をさせていただきました。この機会に若干時間を拝借して、民生児童委員のことを簡単に説明させていただこうと思っております。

民生児童委員の所管は厚生労働省でございます。民生委員法という法律に準拠して選ばれた行政の協力機関というのが私どもの機能でございます。行政と市民との間のパイプ役を具体的には務めているということでございます。任務は、住民の立場に立って、福祉全般、具体的なことになると、高齢者とか、児童、障害者、あるいは生活困窮者、一人親家庭等々でございますけれども、そういう人の福祉相談とか、支援とか、あるいは情報提供をすることが具体的な担当ということになっております。こまごましたことは他にもたくさんありますが、それ以外に地域福祉のコーディネーターとしての役割もあり、これを推し進めていくということも重要な役目なのです。

そういうことで民生児童委員は頑張っているわけですが、民生児童委員は全国で約22万7,000人、京都府では2,669人、城陽市の場合では157人がこの任に当たっています。

話題を本筋に戻しますが、先ほどもちょっと話がございましたように、我が国はかつての右上がりのような経済社会というのは終わっておりまして、これからは成熟した社会が到来するであろうということが予測されております。成熟した社会というのがどういう社会なのか非常に難しゅうございますが、そういうことになるであろうということが予測をされております。

ただし、少子高齢社会というのはついて回っているわけで、このことについては、ひと時も忘れることができないというのが非常に重要な課題であります。

また、ITの時代だとか情報化社会ということが言われながら、社会的孤立というのが現代の我が国の大きな社会問題になっておりまして、この辺のところの解決が非常に難しいということでございまして、児童から高齢者に至るまでのいろいろな事件、事故というのは社会的孤立がその背景にあるということが言われております。困ったときに頼りにな

る、お互いがお互いを助け合う、先ほど今里先生から話がございましたけれども、日本では「互酬性」という言葉に代表される良い慣習があったのですが、こういうものがどんどん消えていくというところにいろいろ問題がありますし、住民風土のつながりが希薄化したということが、社会的孤立が生じる最大の要因だと考えています。

さて、“望ましい城陽市はこれからどうあるべきか”ということですが、私は福祉という観点からは、広範な意味での“安心で安全なまちづくり”を提唱したいと考えています。

余談ですが、福祉という文言の本来の意味は幸福とか幸せですが、1955年以降、久しく、福祉という言葉は、“公的扶助による生活の安定・支援”という、いわゆる救貧という言葉で代表されていたように思います。しかし、近年では、福祉という言葉は「みんなで支えて創造する」というような考え方に変わってまいりまして、その典型が介護保険制度ではなからうかと思っております。ご理解いただけますでしょうか。

前段に申し上げました少子高齢社会への対応ということについては、福祉の諸制度とか諸施策の改革は避けて通れないわけございまして、その改革とは、先ず1番目は身の丈に合った改革、2番目は公助と自助の制度改革、3番目は市民の意識改革、の3本柱に集約されると思います。

しかし、この対策は城陽市のみがすばいという問題ではありませんし、全国レベルで議論しなければならないことであり、この場では割愛させていただきたいと思います。

先ほど申し上げましたように広範な意味での“安心で安全なまちづくり”を提唱しましたが、生来、城陽市に育った人はこよなくこの地に愛着を持っておられますし、私も1970年以降この地に住むようになったわけですが、その理由は、この地が気候と風土と自然災害の少ない自然環境豊かな地域だということです。これに憧れて住み着いた人は非常に多いのではなからうかと思っております。私は人生の半分の三十数年間を山口県と岡山県に住んでおりましたが、ここ城陽市の気候は全く瀬戸内の気候と同じなのです。先ほど久保さんもおっしゃいましたけれども、城陽市は非常に住みよいところだと思っております。

私の独断と偏見で言わせてもらえば、望ましい城陽市というのは、長期的な展望を持って、必要なハードは実行して具現化してもらう必要がありますけれども、自然環境を壊さずに、公害に侵食されない、緩やかな市政の発展を望み、それを期待しております。しかも、それは身の丈に合ったものでなければならぬと考えております。

さらに付言するならば、行政も市民も心を磨いて、あらゆるバリアを除去して、福祉の基本であるところの弱者にやさしい心を大切にする城陽市でなければならぬというように考えております。ということで、広範な意味での安心で安全なまちづくりというのを提唱したいと思っております。

今里： ありがとうございます。では、堀井様、お願いいたします。

堀井： ざっくばらんに話をさせていただきます。商売を城陽でしてまいりまして、新聞やテレビを見ていると、非常に好景気が続いていて、今年の11月には、いざなぎ景気を抜くと言われていています。実際、大手企業を中心にそのような形で数字の上では動いているということになっているんでしょうが、地域にとってかえりますと、商業も工業もなかなか景気回復の実感がないというのが現実です。

もちろん今まででしたら景気がよかったらほとんどの企業がその恩恵を受けていたと思うのですが、そのような状態は当然望めませんし、各企業が独自性を発揮して、差別化を図らなければ生き残れないのが地域にとっての現実であると思います。

今までは商売をしていたら、みんなそれなりに生活ができるというような時代はもう終わっているのであり、今まで以上に腐心をして経営に当たらなければならないというふう

に経営者はみんな自覚をしていると思います。

そのような中で、この城陽の町を見ますと、やっぱり何といても道路整備が遅れているということに尽きると思います。都市計画道路は以前から東から西へ行く立派な道が何本も書かれています。一部、アルプラの南のほうから南部コミセンのところまでは、橋本市長になって道を拡幅していただきましたが、あの道路も本来の計画から言いますと真っ直ぐずっと西のほうへ行って、西城陽高校の南を通過し府道までは行くという計画はずっと前からあります。寺田についても塚本深谷線ですか、大久保バイパスまでズボット行くという計画もあると。計画はあるんですが、なかなかそのとおりにはなりません。財政的な問題は当然あると思いますが、少しでも計画が前進することを期待してやみません。

また、24号線のところに新市街地と先ほど申しましたが、これは第二名神が天津から城陽の間は凍結されていて3年後に見直すという事ですが、城陽から木津川に橋を架けて八幡までを結ぶ路線は決定しております。ところが、決定して完成するのが10年後だというふうな話を聞きまして、大変がっかりしております。市の計画では、今の24号線に西側も東側も道路の横には商業地を設け、その裏側には工業流通ゾーンとして関連企業を誘致するという計画ですが、市がアンケートを取られても進出したいという企業が非常に多いんですね。この計画が実現すれば、今の市内の企業の中でも、工場と住まいが同じだということなところも多々ありますし、新市街地に進出することで住工混在の解消につながると思います。雇用の確保もできるし、またそこで働かれる人の住宅もいるしと。そのためには、やっぱり今現在決定している第二名神の城陽から八幡までの間は、新市街地の進捗に歩調をあわせ、できるだけ早く造ってほしいと思っております。

また、本体の城陽と天津ですが、この間は、これも非常に大事な道路で大動脈なんですね。何かこのごろは採算性だとか、効率性ということばかりを重点的に議論されますが、やはり道路の整備というのは社会資本というぐらいでして、財産なんですね。資産という観点で長い目で見ると、この道路が城陽のまちづくりに大きく貢献すると思います。特に第二名神のその間が開通すると、城陽の東部丘陵地の山砂利跡地の問題も非常に大きく前進するでしょうし、また府が運動公園という形で現在計画をされておりますが、その計画にも弾みがつくと思います。

商工業にとって、個々の企業が独自性を発揮し魅力のあるものを作っていくというのは大原則です。例えば小売さんですと、大手のスーパーと同じものを売っていたら、価格で負けてしまいます。

企業努力を前提としてその発展を側面からサポートするのに道路が一番大切なファクターです。大久保と富野荘間の近鉄の立体交差化も含め、市民と行政が一体になって関係機関に要望していく必要性を強く感じています。

もう1つ、まちづくりで思うんですが、この文パルの周辺には何もありません。例えば講演がある、コンサートがある、いろんな会議がある。その後さあ食事しようかという事になると、他の場所まで移動しなければなりません。常に思っているんですが、寺田のまちづくり協議会でも議論をされておりますが、もっと商業の集積を図り、遊びの空間とありますか、楽しみを持てるような場所にしなければならないと思います。この文パルの周辺をそのような場所にできたらいいなと常々思っております。

今里： ありがとうございます。では、栗栖さん、お願いします。

栗栖： それでは、私のほうからは、城陽市が直面する課題とありますか、そういうものをかいつまんでお話をさせていただいて、それに対して、行政なり、市民の皆さん方がどう取り組んでいただくのかという点について触れさせていただきたいと思います。

まず、先ほど有川次長も若干触れていましたけれども、やはり少子高齢化社会が進行しているということはあるわけですが、特に城陽市の場合は、少子といいましても、出生率は低いんですが、まだ極端に少なくなっているということではないんですが、やはり高齢者の方々が非常な勢いで増えておるといことがございます。

人口そのものも平成17年度で8万1600人ほどになっています。これは平成8年から徐々に少なくなってきました。平成8年を見ていると、これがピークなんです、8万5500人の市民の方々がおられたわけですが、転入されている方も多いんですが、それ以上に転出されるという人口構造になっています。いわゆる自然動態という市内で生まれる方、亡くなられる方、ここは若干増えたりもしておるんですが、そういう社会動態のほうで人口が減っておるとい状況がございませう。

この17年の8万1600人というのは、実は昭和60年のときの人口とほぼ一緒です。60年からずっと増えてきていた。ですから今、こういう形で減少傾向がある。

これを申し上げたいのは、実は城陽市の財政構造を言いますと、市民税と固定資産税がほとんどなんです。やはりこれまで昭和40年代から急激な住宅開発で人口急増になって、皆さん方の市民税、固定資産税で市の運営がやりくりできていたということになっていまして、今も実は変わっておりませう。そういうことになりませうと、やはり人口減少ということについては、城陽市の財政基盤そのものに大きな影響を与えておるといことがまずございませう。

それと、もう1つは、国が非常な財政危機に陥っています。地方財政も危機の状態があるんですが、はっきり言いまして、地方全体に比べると国の財政というのは極端に悪いという状況になっています。三位一体改革は財政改革のためにやっているのではないんですが、三位一体改革の中で特に地方交付税を大幅に減らしてきています。これが特に小規模町村には非常にきいていまして、城陽市におきましても毎年数億円単位で交付税が実質的に減っておるといことが大きく影響しています。

先ほど言いました税ですけれども、最近でいえば大体80億ちょっとの市税です。これは市民税、固定資産税合わせてですが、16年の一般会計の予算規模がいくらかといいますと270億なんですね。それ以外、何で賄っているのかといえば、いわゆる交付税とか、補助金とか、いろんな負担金とか、市債の発行とかで何とかやりくりしていると。城陽市の

場合は、はっきり言いまして脆弱な財政構造の上に成り立っておることがございます。

そういう中で、実際に今直面する課題ということなのですが、先ほど鈴鹿さんもおっしゃっていたやはり今、安全・安心、これは一番大きな関心事と申しますか、必要な対策だろうと。特に防災、防犯。それから、特に城陽市の場合は地下水が豊富なんです、これに対する保全と安全性の確保、環境の施策、こういうものが一番大きく求められているだろうと。これが逆に言うと課題であると。

それから、先ほど来出ていましたけれども、福祉施策、これは高齢者施策もそうですが、子育て支援策というのも非常に大事になってきています。それから、教育施策ですね。これも当然子育てということであるし、また教育というのは非常に重要なものですから、この教育と、実は建物が人口急増期に建てたものですから、老朽化してきています。これのいろんな建て替えとか、そういうものが出ていまして、さらには、特に堀井さんも触れられましたけれども、都市基盤ですね。やはり生活環境、生活道路、鉄軌道、第二名神を含む幹線道、こういうものの整備と申しますか、それが大きな課題になっておると思っております。

ただ、下水道はあと数年でほぼ全域が整備完了いたします。ところが、整備はできるんですが、実はこの下水道整備には大きな市債を発行して事業を進めていますので、今後、この償還が1つのまた逆の課題に上がってくるということがございます。

それから、特に山砂利対策ですね。この山砂利対策については城陽市のほんとうに大きな特徴になっているわけですが、これを何としてもきちんとして対策を講じて、跡地整備に結び付けて市民に還元をしていくというふうな市の活力に結びつくような対策が必要ということがあります。

それから、当然、農業、商業、工業なんです、先ほど申し上げましたように、工業系が城陽市の場合52haあるんですが、商業系というのは2haです。住居系では約700haあります。それ以外は何かといえば、いわゆる調整区域になるわけです。それが約2500haほどあるんですが、こういう部分について、先ほど堀井さんも触れられた新市街地、この取り組みの中で都市としてのバランスを取れるような形にしていきたい、それによって活力を生み出したいということで行っていく必要があるというふうに思っています。

こういう課題の中で、やはり市民の皆さん方と協働がなければ、行政だけで、税金だけで賄うということは到底できないような状況になっていきますので、団塊の世代の方々も地域に帰ってきていただきますので、今でも城陽の場合は地域活動が非常に活発ですけれども、これをさらに深めていくとか広げていく、そういうチャンスかなと思っていますし、そういう取り組みをしていっておるところです。

行政としては、やはり徹底した行革を、これまでも一定やってきておりますけれども、さらに徹底していきたい、していかなければならないと考えております。以上です。

今里： ありがとうございます。課題山積というところで、暗い感じになるかもしれませんが、めげないで、大本さん、市民の立場からお願いしたいと思います。

大本： 私は大学が大阪でしたので、大学に通っていたときに、「おうちはどこ？」と言われて、

「城陽」と言うと、「城陽ってどこ？」と大阪の人からは言われまして、京都と奈良の間とか、イチジクで有名な城陽とか、サツマイモの有名な城陽とか、そういう説明をしていたんですが、確かに住宅地で、こういった特徴のあるまちではないんだなということを感じていたわけです。

例えばイチジク農家ですとかサツマイモ農家の高齢化、後継者不足の問題とか、そういう話もワークショップで出ていたんですが、今スローライフブームですとか、そういったこともあって、若い世代でも自分たちで農作物を作りたいと思っている人たちも多いので、ぜひそういったノウハウ、そして地域の特性を生かした農業みたいなことを教えていただいたり、土地を借りたりして、一緒に楽しめるような形に変えていくというのも1つの方法かなと感じたりしていました。

先ほど時間切れでお話しできなかったワークショップの活動のテーマに沿って少しこれからの城陽市はどうあるべきかということをお話しさせていただきたいと思います。

コミュニティ活動の活性化や安心して暮らせるまちづくりについてというテーマと、それから健全な行政経営についてということだったんですが、私たちの世代、あるいは私たち以下の世代というのは、例えば新聞の折込チラシと一緒に入っている広報誌をどれぐらいの人が見ているんだろうか、目を通してしているんだろうか。若い世代は新聞をとっていない世代も非常に増えてきています。情報発信を行政のほうからしていただいているその情報があまり届いていないのではないかなというような感じがするので、行政の広報誌を発行しているので全市民に伝えていきますというものは、受け手としてはどうなのかなという発言もさせていただきました。

そして、行政の情報を地域の活動に無関心な若い世代、若い人たちだけでなく、私たち以上の世代でもそういったことに全く関心がない、参加したくないという方々もおられるんですが、これから地域活動を支えていかなければならない若い世代にどのように行政の情報とか、地域活動に関心を持ってもらうのかというのが今後の大きなテーマになるのかなという気持ちを持っています。

そして、高齢者の中にも、十分な情報が伝わってなくて、よりよい生活ができる福祉の情報を知り得ていなかったために、損をしているではないんですけども、もうちょっとそういうことを事前に知ればなというような声もよく聞かれますので、城陽市の例ではなかったと思いますけれども、介護保険制度をあまりよく知らなくて、それを利用していないですとか、そういった高齢者もおられるということなので、よりよく生活ができる福祉の情報を広く高齢者にどういうふうに届けていくのか、これからいろんなことが変わっていくと思いますので、そういった先端の情報をどういうふうに届けるのかということも行政のほうで考えていただきたいなという話をさせていただきました。

それから、福祉に最も縁のない世代と思われていた、子育て支援ですとか高齢者支援とかは徐々に手厚くなってきていますが、若者支援ということで、ここ数年頻発しています中高校生の痛ましい事件を考えますと、思春期の子どもたちの生きづらさとか、親の子育てのしんどさというのが大きな社会的な課題になってきている今、子どもたちが発しているSOS、メッセージに耳を傾けて、その子どもたちが生きやすい社会、地域にしていく

ということが喫緊の課題なのかなというふうに感じています。身近なところで言えば、小学校高学年を含めた中高校生の居場所づくりということが、全国でも幾つか事例はあるんですけども、子どもたちが楽しい、落ち着ける、居心地のよさを心から感じられるような空間づくりとか、そういったものにもう少し目を向けていただければありがたいかなというふうにも感じています。

まちづくりは人づくりかなというふうに思っておりますので、人材育成にぜひ予算をつけていただきたいということで、例えば私が今かかわっております介護福祉に関心のある若者は非常に多いんですけども、ホームヘルパーの資格ですとか、介護福祉士を目指す養成学校で時間をかけて専門的に授業、実習を受け、介護現場で活躍をし始めているが、十分なお給料が保証されていないために、あるいは過酷な労働条件であるために転職してしまう、長く続かないというケースが非常に多くなってきています。職住接近ということで、地元の城陽市に多くの労働条件の悪くないグループホームですとか、そういった就職口があり、親などから自立できるだけの、結婚して生活がやっていけるだけのお給料が保証されていれば、通勤時間の短縮とか、生活時間にもゆとりができて、仕事、子育て、介護といった仕事と家庭の両立というのがしやすいのではないかなと。そういう施設がたくさん増えて、そして若者もそこで働くことができるというようなまちを目指したいなとか、あるいは保育士と介護福祉士の両方の資格を持っている若者も増えています。高齢者だけではなくて、子どもも一緒に預かれるような施設、そこに小中高校生が放課後の居場所としてフラッと立ち寄れるような、そして元気な高齢者も子どもたちの遊び相手ですとか、宿題を見てあげられるような、そういう地域で参加できるというか、自然な異世代交流ができるような施設、そういうものがあってもいいのかなという気がしたりしています。

福祉を目指す若者があまりそういうことに関心を持っていない若者と、そしてすごくそういうことを職業として選ぼうとしている若者と、どこに違いがあるんだろうということが数年前から気になっていて、少し調査をしているところなんですけど、やはり自分自身が病気になったり、家族が病気になって入院経験があるとか、そういった体験をした子がわりと福祉関係に進んでいるということがありますので、生活体験が非常に狭まっている中で、高齢者との接触も少ない中で、小中高の教育の中でいろんな体験型の授業、イベントではない体験、一連の流れの中に息づいた教育的な意味を持った参加型の授業というものが特に必要になってきているなというふうに感じています。自分自身の体験に基づいた意志というのは非常に強固だと思いますので、そういう形で自分自身が志した職業を夢を持つてできるような、そういう環境を提供していくということも地域として考えることができるのではないかと考えています。時間ですので、また次に回します。

今里： ありがとうございます。何も言っていないんですけど、テレパシーで伝わったかなと思います。こういうコーディネーターとか司会をやっていて一番嫌なのは、もうやめてくださいとか、発言を制約する、本意でないことをしなければいけないのは辛いところで、言いたいだけ言ってくださいというのが本音なんですけれども、15時55分に閉会と書いてあるんですけど、あと15分しかなくて、私もどうしたらいいのか途方に暮れております。次は各自5分とありますが、3分という意識を持ってご発言いただければと思います。

次は3回目になるんですが、いろいろ課題とか目的を言っていたいただきましたが、どうやってそれを実現するのか。特に協働ですね。行政との、あるいは住民相互との協働ということはどうやって実現していくのかということ。できたら課題を1つぐらいに絞って、例えば堀井さんだったら、都市計画道路をどうやって実現したらいいのかというあたりを1つに絞って、具体的な手法についてお話しいただければと思います。順番をまた1つずらしまして、今度は鈴鹿さんからお願いいたします。

鈴鹿： 非常に難しいんですけど、望ましい城陽市はどうあるべきかということで、概括的なことだけちょっとお話ししようかなと思っております。

まず地域がどうあるべきかということなんですけれども、先ほどもちょっと話がありましたように、向こう三軒両隣を大切に作る地域づくりでありたいと思います。いまや自治会不要論みたいなことを吐いている人がいるんですけど、そういうことが横行しないような行政指導みたいなものがないものかと思っております。自治会は市と市民のパイプですので、この辺が一番大事ではないかと思っております。

次は、みんなが知恵を出し合って地域づくりに協力することであり、これをするかしないかでは、大きな差が出てくることを地域は認識しなければなりません。

更に、元気印の高齢者ですがこういう人の協力を得て、費用をかけずに地域社会に力が出るように高齢者に対して、地域を挙げて要請していくことが肝要ではないかと思っております。

望ましい行政組織のあり方でございますが、私は行政内部にあまり精通しておりませんので、こういう発言をすると問題があるかと思っておりますけれども、第1は、組織はしょせん人であり人が組織を創造するわけですから、男女両性の個性と能力が光るような組織であらねばならないと思っております。

第2は、情熱と知恵と行動力のある人を百年の計を立てて育成することです。人材育成ということは非常に大事であり、やる気を持って、よく考えて、新しいことを創造する人、そういう三拍子揃った行政マンがこれからは必要ではないかなと思っております。

余談でございますが、9月21日の小泉メルマガを見ておりましたら、5年間の政権担当についての謝辞を小泉さんが発信しておられました。その中に、“徳のある人は才がない、才のある人は徳がない”、と言われていますが、自分は気の弱い普通の常識人であると自己評価をされています。しかし、「いつも何かに守られていて、運がいいなあ」と思いながら頑張ってきたとありました。したがって、三拍子揃った上に「運・鈍・根」の“気”を持ち合わせる必要があるのかもしれないかもしれません。

第3は、不毛の議論はこれを廃し、まとまる、まとめるという議論を真摯にしていく必要がありますし、否定型を廃し提案型でいろいろやってほしいと思います。

第4は、効率一辺倒のベストを求めるのではなく、一步引いたベターを追い続けてほしいのです。ベターを追い続ければ必ずベストに到達します。行政は市民にとってはサービスの組織であることも考慮しておくことが必要です。

第5は、時代に追従しきれないような制度や規範は、勇気を持って改変・改善することが肝要であり、常に見直しに意を払ってほしいものです。

最後は、一番大切なことでございますが、縦割り行政から生ずる各種弊害の排除に、真

剣に取り組んでいただきたいと思います。ただ、行政は経営が苦しいからといっても廃業ができないという苦しさがあります。それだけに市民を巻き込んで市民を感動させ、市民と共感で結ばれた市政であり、確たるポリシーを持った行政でなければならないと考えています。

あわせて、先ほど話題になりましたが世の中には、官と民の間にパブリックというものがあり、これが重要な時代になってまいりました。ただ、個や私を大切にするあまりに、この辺の勘違いにより自己中心となり、パブリックが忘れられたことでいろいろ弊害が出ておりますので、パブリックを再構築したいものです。皆さんはどうお考えでしょうか。私からはこのようなことを提案させていただきたいと思います。

今里： ありがとうございます。それでは、堀井さん、お願いします。

堀井： 残り時間が少ないとの事ですので短く話をさせていただきます。

同じようなことなのですが、企業は人なりという事がよく言われます。まちづくりも人づくりからということで、人材の育成が何よりも大事だというのはもちろんの事、特に助役さんからも話がありましたように、財政が非常に逼迫してしまっていて、お金がないんですね。そんな中で、やっぱりボランティアといいますが、学校教育、家庭教育も含めまして、ボランティア心の大切さといいますが、ある意味強制的でも小さいときにそのような形を身につけさせたほうがいいんじゃないかと思っています。

それと、コミセンというのは城陽に6館ありますが、これは新旧住民といいますが、新しい人と古い人との接点にもなっていますし、ふれあいの場づくりという形で非常に意義ある活動をしていると思います。その中で、せっかくたくさんの地域の人に来てもらって、コミセン祭りとか、いろんな大きなイベントをしているわけです。このパワーをまちづくりのほうに生かせないかと。ただ単にコミセン側が、運営委員、専門委員さんがサービスを提供しているというだけにとどまらず、何かそれを利用してボランティア的なところに生かせたら非常に有益だなと常々思っております。以上です。

今里： ありがとうございます。では、栗栖さん、お願いいたします。

栗栖： 端的に言えば、やはり城陽市を魅力あるまちづくりをしていくと。そのためのツールといいますが、市の活性化、そういうものは活力を生み出していくということが必要なことと思っております。そのためには、先ほど来ておりますけれども、いろんな条件をクリアしながら、そして市民の皆さん方が行政を助けるといいますが、行政とともに一緒にまちづくりをする、そういうことを目指していくことが、これからいろんな局面があるうかと思っておりますけれども、打開するための方策かなと考えております。

今里： ありがとうございます。プレッシャーがきいたのか、えらいスピードが上がっておりますが、大本さん、お願いします。

大本： 1点ということなので、地域を支える若者をどう育成していくかということで、現在ご活躍いただいている世代が、今度は団塊の世代へのバトンタッチ、地域の担い手としてバトンタッチされるであろうというお話がありました。またその次の世代がきちりと地域が支えられるような地域活動の担い手を育成するというを現在活躍いただいている世代にご指導いただきたいと思います。と思っています。

そして、仕事と家庭が両立できるような仕組みづくり、地域づくり、それから、ささやかでも価値のある、ほんとうの豊かさというものが感じられるまちづくり、そして地域を開くということは自分自身を開く生き方、閉じていては地域を支えられないということで、自分自身も開き、そして家族、家庭生活も開く、そして緩やかにつながるコミュニティを作っていく、できないことはすみませんと手助けをお願いできる力、そういうものを若い世代に育成していきたいなど。温かい心に触れると、またしていただいた分、次にお返しをしようと思える、そういうことが心の通い合うまちということにつながっていくのかなという気がしていますので、地域づくりは心づくり、心の育て合いということで、こういったことを重視していきたいなど。

物が溢れて、豊かな生活環境で育った若者というのは、感性も豊かですし、非常にやさしくて穏やかです。そういった子どもたち、若者のよいところを伸ばせるようなまちづくりが求められているのかなということで、今小さい子どもたちが3つの「間」が不足している。つまり、人間、空間、時間という間が不足しているというふうに言われていますが、大人も豊かな人間らしい生活環境として生活空間、地域があるというような、そしてそこに生活している人の生活をより人間らしくするというで、生活者の視点に軸足を置いた地域づくり、施設づくり、そういうことを期待したいと思っております。

今里： ありがとうございます。最後になりましたが、久保さん、お願いいたします。

久保： プレッシャーがかかりますが、2つ言わせてください。先に子どもの教育ということで、私立の中学、高校へ進学している方々は十分城陽エリアにもいらっしゃるのではないかと。子どもたちは電車に乗って通学する。その方々が比較的頭とか体力とか、優秀な子どもたちが外へ出て行ってしまふ。その子たちは根無し草なんですね。小学校は一緒だったけれども、中学、高校は全く違う。そうすると、帰ってきたって友達がいない。高校の友達といってもエリアがばらばらですから、なかなか友達づきあいができない。根無し草の子どもたちが育ってきている。これは非常に危険なことだと思います。それは子どもの問題です。

親もそうですよね。PTAの活動にしたって、小学校のときはあったけれども、中学、高校になるともう関係なくなってしまって、会合に参加しない。遠いし、しんどいし、行けへんと。全くコミュニティが崩壊してしまう。子どもたちだけが受験戦争に狩り出されるという非常に危険な状態。

これを解決するには、城陽として魅力ある中学、高校をどう作っていくか。子どもたちを地元の中学、高校にどう来させるかということが非常に大切だと思います。未来の城陽を背負っていく子どもたちを僕らの責任で作っていかねばいけないと思うんですね。これが1つです。非常に大切だと思います。

それから、もう1つ、さっき2階建て、3階建ての話をしましたけれども、3世代がゆっくりと生活できるようなパイロットエリアみたいなものを作って、これは自分の体験なんですけれども、140軒ぐらいあった家だったんですけれども、同世代ですよ。そうすると、15年ぐらいすると子どもたちがみんな大きくなって、小さい子どもたちの声が聞こえない。それが社会人になってしまうと、ほんとうに老人だけのまちになってしまうとい

うところだったんですけれども、幸い、準工業地帯なものですから、建蔽率の問題とか、3階建てもOKとか、分割もOKとかいうので、調子の悪い人、倒産した家の人は、空き地になるのではなくて、そこへ2軒建ったり3軒建ったりして、当然若い人たちが住んでくれている。赤ちゃんの泣き声がする。子どもたちの走り声が聞こえる。そうすると、僕の娘たちも、その子どもたちの様子を見ながら育っていくわけですよ。小さい子どもたちも、娘は30ですけれども、その子どもたちの様子を見ながら育っていく。私も母親になりたいなとかね。新しい世代の人たちは、地域のおじいちゃん、おばあちゃんに何でも相談できるということが今までであったんですね。これからは、それを自分の中で三世代が住めるような、僕がいて、娘がいて、孫がいると。そのためには3階建ても必要でしょう、建蔽率も何とかしてほしいし。それから、三世代住むようなところには行政としても何か援助していくとか、そういうパイロットエリアみたいなものを城陽のどこかに作ってみてはいかがかなという気がいたします。まとめませんが、以上です。

今里： ありがとうございます。大変協力していただいて、協働によるパネルディスカッションづくりができましたですね。ここで会場からご意見を求めるということですが、時間がございませんので、お1人、ご発言、ご質問をいただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

参加者： 城陽に住んで昭和38年から四十何年になります。その間に自治会長とか、あるいは体振とか、社会教育委員とか、公民館運営審議員とかいろいろさせていただきましたが、皆さんのお話の中で、まちづくりは人づくりなんだと、これは非常に心強いと思うんですが、城陽のまちでは、人づくりに対してははっきり言って捨て育ちなんですね。だけど、集めて教育したとか、そういうのはけしからん話なので、ごく自然に情報交換、それから何か役をしようとしたら研修はいるぞと、こういう自覚がいきますね。これは的確な情報を集めないといけません。

そういう中で、先ほど、最後に、京都市の春日地域の社会福祉協議会ですか、あそこの活動を紹介していただけなかったんですけれども、あそこの活動を知ることによって、城陽のまちの久世という地域には青少年健全育成久世会議、いろんな団体が集まっているのがあるんですけれども、そこで何をしようかというときに、ここは、ちょっと舌を噛むような言葉ですが、コミュニティ・オーガニゼーションですか、いろんな団体が1年を通して何をやっているということを交換しておられるんですね。それを見て、これは私らもやろうかなというふうなことで元気が出てきまして、青少健で毎月、新聞を出しているというのはこの久世地域だけだと思えるんですけれども、これがほかにもあってほしいなど。あなたのところはどうか、うちはこうやという情報交換がありますと元気づくんではないかなと、そんなふうな気がします。

もう1つ、東のほうに深谷という学区がありますが、ここの福祉協議会は、構成率は一番少なくて68%かそこらなんですけれども、活動が一番目を引く、こういうのがあるんですけれども、それぞれ青少健、老祉、城陽市内全部で、あるいは社協はやっていると思えますけれども、交流の場というのはぜひ大事にしてほしいなど。

もう1つ、自治会長をやりますと、5月ごろですか、ここへ集まって研修というか、市

政のご理解をいただくというパターンでお昼ご飯を出してもらってやるんですけども、あの機会を、各自治会が今どういう課題でどう取り組んでいて、どんな問題を持っているかなど2つぐらい紹介する、こういう機会にすると、結果的には自治会長さんの研修になるし、情報の交換になるし、そんなことを指をくわえて見ておりました。言いたいことはまだあるんですけども、失礼します。

今里： ありがとうございます。今のお話を広げてやりたいんですが、大学のゼミみたいにワアワアやりたいんですが、ほんとうに残念でございました。

私も少し言わせていただきたいとは思うんです。これまで2年ぐらいですか、行政改革委員会、まちづくりワークショップ等にかかわってきた立場から、3つぐらい提案をしてみたいと思います。

1つは、城陽市というのは、もともと田園地帯にできたところですね。田畑の上に自然と町ができていった。だから道路計画ができないままに住宅が広がっていったという、いわゆるスプロール化していった地域です。逆に言うと、道路はまっすぐでない、まだ田んぼや畑はこの文パルの周りにもたくさん残っているわけですが、そういう自然環境、かつ田畑が残っているというところが強みだと思います。

この田畑を利用して、後継者の方がいなくなった畑とか田んぼを、これまで農業経験のない方が使って、いわゆる自給自足をやっていけるところです。これから食というのは非常に大事でございます。なぜとなれば、日本人の死因の60%以上は食べ物に原因がある病気で、いい食べ物、健康な食べ物を食べないと病気になってしまう、こういう時代になっておりますから、まず命を考えるには食を考えなければいけない。食を考えるには農を考えなければいけない。命と食と農のつながりというのは非常に大事にしていかなければいけないんですが、それを、ここは自分たちの力で解決できる可能性を非常に秘めた地域だと。マイナスであるがゆえに、それをプラスに転換できるのではないかと。これが1点です。

2番目は、皆さんのご発言の中にもありましたけれども、居場所づくりです。みんなが集まってわいわいがやがやと、緩やかな、しなやかなつながりを作っていけるような、大人の、子どもの、高齢者の、あるいは障害を持った方々の居場所づくりというのが必要だと思います。一言で言うと公共空間といいますか、そういう居場所をいかに使うか。いわゆる公共施設、こういうところでは、ここでわいわいと一升瓶、焼酎を持ち込んで朝まで飲もう、これはなかなかできませんよね。だから、一升瓶持ち込んで朝までわいわいやれるというような場所を城陽のあちこちに作っていくというのがいいんじゃないかなと思っています。しかも畑でとれた枝豆とかキュウリとかをそのまま持ち込んで飲んだら最高ですね。そういう居場所づくりが2番目の提言でございます。

3番目ですけども、古い新興住宅がたくさんあります。ここで昔の若い夫婦が高齢化して、介護保険のお世話になるということが、これは城陽だけではなく、全国的に増えています。じゃあどうしたらいいかということですが、私の提案は、不便なところで介護を受けるよりも、むしろ要介護状態になる前に都会の京都市内とか、交通が便利な、歩いて買い物ができる、そういう都心に要介護直前に移っていただいて、広い住宅が必要な若い

世代にこちら側に来ていただく、そういう居住の交換、居住の循環という仕組みを、城陽だけではなくて、京都市とか広域でそういう仕組みを作っていくということが大事じゃないかな。これは広域でやらないと解決しない問題です。むしろ都心こそ高齢時代を過ごすのにふさわしいのではないかなというのが私の最近考えているところです。この辺、広域で考えていただければと思います。

ちょうど4時を2分回りました。これは予定より7分遅れたわけですが、タイムキーパーとしての司会の役目を完了できたのではないかと考えております。

パネリストの皆様、本当にありがとうございました。またご協力どうもありがとうございました。

司会： どうもありがとうございました。まだまだコーディネーターの今里先生、そしてパネリストの皆さんのご意見をたくさんお聞きしたいんですが、そして会場の方にもご意見をいただきたいところではございますが、残念ながらお時間が来てまいりましたので、またこういう機会を持たせていただくように城陽市に要望しておきますので、ご参加いただきたいと思います。

いま一度、コーディネーターの今里先生、パネリストの皆さんに大きな拍手をお願いいたします。本日はまことにありがとうございました。これからも城陽市のまちづくりのためにいろいろとご意見をいただきたいと思います。

そして、会場の皆様、長時間にわたりましてこうしておつき合いいただきましてまことにありがとうございました。城陽市では、これからも市民と進めるまちづくりを基本姿勢として、よりよいまちづくりを進めてまいりますので、皆様のご参画をよろしくお願いいたします。また、何かご意見がございましたら、行政改革推進課までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

本日は長時間にわたりましてまちづくりフォーラムにご参加、まことにありがとうございました。これをもちまして終了させていただきます。ありがとうございました。

以上